

## <研究ノート>日露戦争と陸軍経理部(1)日露戦争における陸軍経理部の経済情報活動について

著者	橋 敦彦
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	65
ページ	19-41
発行年	2006-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10837">http://hdl.handle.net/10114/10837</a>

## 〈研究ノート〉

# 日露戦争と陸軍経理部(一)

——日露戦争における陸軍経理部の経済情報活動について——

高橋 敦彦

## はじめに

筆者が陸軍経理部のことに関心を抱いたのは、帝国陸軍の兵站活動全般に重要な役割を果たしながら、その存在が不当に軽視されていると考えたからである。

陸軍経理部を通じて帝国陸軍の歴史を研究することにより、偏りのない歴史の真実の追求が可能になるのではないかと考える。これは戦史の研究のみならず歴史の研究全般に必要なことである。

本稿は日露戦争開戦前に陸軍省経理局の主導で実施された経済情報活動の実態を明らかにすることにより、陸軍経理部が日露戦争において果たした役割の一端を考察する。

## 一 帝国陸軍における経理部の地位と役割

帝国陸軍<sup>(1)</sup>は兵科と各部からなる。陸軍経理部は、各部(他に軍医部、獣医部、技術部及び衛生部がある)の一つで、川口武定<sup>(2)</sup>の

建議によりオーストリア・ハンガリー帝国の軍監督官制度を取り入れて作られた制度である。帝国陸軍の軍務は統帥と軍政に分けられる。統帥とは最高指揮官等が軍隊を指揮・命令する作用。軍政(広義の軍政)は、軍隊を編成し維持管理する作用で常備兵額の決定、部隊その他の機関の編成、管区の設定、徴募、補充、教育、検閲、紀律、服制、衛戍、要塞、動員計画からなる編制と人馬の給養、軍需の調達、軍需の保持補給及び理財からなる経理(狭義の軍政)からなる。経理部は経理の中の会計経理である、金銭経理、糧秣経理、被服経理、営繕経理及び需品経理を担う組織である。軍及び師団の司令部に経理部が置かれ(当初は監督部と称した)、経理部長は指揮系統では軍司令官及び師団長の指揮下にあるが、予算・業務系統では陸軍省経理局(戦時の場合は野戦経理長官部)を通じて陸軍大臣の監督下にあった。

また、経理部士官及び下士官を教育訓練するため明治二三年に陸軍経理学校が創立された。経理学校は軍政・経理の制度・運用についての調査研究を行う機関としての役割も果たした。

第1表 陸軍経理部による日露戦争時の経済情報活動

戦闘が予想される地域	調査が必要な理由	調査担当経理官階級と氏名	調査時期	実際に行われた戦闘・部隊	他の機関による情報活動
朝鮮半島	日本が自衛上是非とも勢力下に置かなければ成らない地域。	三等監督 高山嶺	明治36年8月から9月まで	第1軍による鴨緑江の戦い、北韓軍の戦闘	松石安治（京城） 東郷辰二郎・佐々木きを（義州） 桜井久我治（鏡城）
樺太	露領、北海道に近接している。	三等監督 濱名寛祐	明治35年頃調査	独立第13師団の作戦行動	
ロシア極東地方	露領、アジア経路の策源地、シベリア鉄道によりヨーロッパと連絡可能。	監督補 （三等監督） 濱名寛祐	明治34年5月から明治35年7月まで活動、その後ロシア側に逮捕・抑留、明治37年12月に帰国		山岡熊治（ウラジオストク）
満州	清領、実質的にロシアの占領下。	三等監督 濱名寛祐	明治35年3月～4月哈爾濱に滞在	日露両軍の主要な戦場遼陽の戦い、奉天の戦い	特別任務班の破壊工作 横川省三、沖積介、森田兼造
遼東半島	清領、ロシアの租借地、旅順はロシア太平洋艦隊の根拠地。	未確認		第3軍による旅順攻防戦	守田利達（芝罘）
華北	清帝国の中心地。	未確認			青木宣純・川島浪速（北京）
蒙古	清領、ロシアの勢力が浸透中の地域。	未確認			河原操子（カラチン）

※ この表は「明治卅七八年日露戦史」（1912）、「日露戦役奇伝 敵国大横断記」（1928）、「蒙古土産」（1944）、「機密日露戦史＜新装版＞」（2004）及び「国内物資調査報告」（1903）を出版として作成。「明治卅七八年日露戦史」は本文註（6）、「敵国大横断記」は本文註（21）、「蒙古土産」は本文註（25）、「機密日露戦史」は本文註（8）、「韓国内物資調査報告書」は本文註（7）を参照。

このように経理部は軍政面では強い影響力を有する反面、例えば経理部士官は将校相当官とされ、部隊の指揮権を有する将校とはみなされない等の差別的待遇を受けた。

## 二 日露戦争における陸軍経理部の経済情報活動について

日本は、明治廿七八年戦役すなわち日清戦争後の三国干渉及び北清事変の結果、ロシア帝国との利害対立が深刻化し、明治三五年までには開戦を睨んだ情報活動の必要性が高まっていた。

日露戦争の情報活動については従来、参謀本部第一部の松川敏胤大佐と参謀本部第二部の福島安正少将による情報活動が知られているが、軍隊の兵站活動に直結する経済情報については、陸軍省経理局長・監督監（少将）外松孫太郎を中心にした情報活動が行われていた。

陸軍経理部の経済情報活動の全体像は判明していないが、簡潔にまとめると第1表のようなものではないかと推測される。

朝鮮半島は、当時は日本が自衛上是非とも勢力下に置かなければならない地域と認識されており、参謀本部が主体となった情報活動と同時並行して、外松経理局長の命により明治三六年八月から九月にかけて三等監督高山嵩が偵察し、経済情報を収集している。朝鮮国は当時まだ独立国であったが、事実上日本の勢力下にあったので日本の軍人が公然と情報活動を行うことができた。高山監督は在留邦人や朝鮮国の官吏等の協力を得ながら経済情報を収集し、「韓国内物資調査報告」として陸軍省経理局に報告している。開戦後の鴨緑江の戦い以後は大規模な戦闘は行われていない

が、北部の日本海沿岸では小規模な戦闘が行われている。

ロシア極東地方は、まさにロシア帝国のアジア経略の策源地であり、ヨーロッパ・ロシアとシベリア鉄道で連絡されている。是非とも情報が欲しい地域であるが、ロシアの領土であり日本の軍人が公然と活動できる状況ではない。ウラジオストク等の公使館の駐在武官等を通じての情報活動では十分なため、陸軍監督補（三等監督）濱名寛祐が潜入して経済情報の収集に当たった。

満洲は、日露戦争の主戦場になった地域であり、清国の領土でありながら、北清事変を契機として実質的にロシア帝国の占領下にある地域であった。陸軍大將児玉源太郎の命を受けた北京の日本公使館駐在武官、青木宣純大佐が清国の袁世凱の協力を得て、情報収集を行っている。明治三五年三月頃に三等監督濱名寛祐が哈爾濱に入っており、経済情報の収集を行っていたと思われる。樺太は北海道に近接する地理的条件から将来なんらかの作戦行動が予想されたので、明治三五年頃濱名寛祐が入って調査している。

明治三八年七月に独立第一三師団が上陸し占領している。

遼東半島は、三国干渉によりロシアに奪われた怨念の地であり、旅順はロシア太平洋艦隊の根拠地である。対岸の山東半島の芝罘に工作員が入って情報を収集していた。陸軍経理部の情報活動は未確認であるが、第三軍による激しい戦闘が行われることとなった地域である。

華北は清国の中心である。清国は日清戦争の復讐よりもむしろロシアの脅威を重視して、情報収集で日本に協力した。この地域

での陸軍經理部の情報活動は未確認である。

蒙古は、清の領土であるが、ロシアの勢力が浸透中であつた。明治三六年一月に日本に好意的なモンゴルの王族の下に女子学校の教師として河原操子が赴任し、情報収集に協力した。陸軍經理部の情報活動は未確認である。

このように陸軍經理部は戦略的に重要で、かつなんらかの作戦行動が予想される朝鮮半島、満洲、ロシア極東地方及び樺太といった地域における経済情報の収集を重点的に実施して、対露開戦に備えたものと推測される。

### 三 陸軍三等監督高山嵩による朝鮮半島の調査

朝鮮半島は、当時日本にとっては自衛のため是非とも確保しなければならぬ地域として位置づけられていた。そもそもロシア帝国が朝鮮半島に勢力拡大を図ったことが開戦の原因の一つである。しかしながら、明治三五年の段階では日清戦争から八年が経過し、当時得られた情報は陳腐なものとなっており、作戦行動に必要な朝鮮半島内の情報を十分に得ていなかったと思われる。陸軍では当初、来るべき対露戦争は、日清戦争と同様に朝鮮の支配権をめぐる朝鮮半島内に侵入してきたロシア軍を朝鮮半島内で迎撃すると考えられていたので、その構想に沿った情報の収集が計画された。

『機密日露戦史』<sup>(8)</sup>によれば、明治三六年七月に参謀次長田村怡与造少将(明治三六年一〇月死去)<sup>(9)</sup>は、井口省吾少将<sup>(10)</sup>及び松川敏胤大佐に朝鮮国内の物資及び野砲通過のための道路視察を命じ、四名

の少佐と二名程度の経理官が随行して、松川大佐が釜山、大邱島岑道から京城までの道路(京釜北路)、井口少将は西海岸沿いの京城までの道路(京釜南路)を偵察し、九月上旬に帰国している。これらの動きと同時に並行して陸軍省経理局長外松監督監(明治三六年一二月に制度が変わって主計監<sup>(11)</sup>は、朝鮮における経済情報に重点を置いた実地偵察を計画、陸軍三等監督高山嵩(以下高山監督と略す)に朝鮮半島の調査を命じた。

高山監督は、千葉県の出身、輜重兵大尉から経理官に転科した人で、当時の所属は不明であるが、おそらく輜重兵将校の経験を買われて調査を命じられたと思われる。但し、日清戦争の従軍経験はなかったようである。彼の日露戦争中の動静は不明であるが、戦後は順調に昇進し師団の経理部長、陸軍経理学校校長等を歴任、第一次世界大戦では独立第一八師団経理部長として青島攻略戦に参加、主計監(少将)まで昇進している。

高山監督が外松経理局長から受けた命令は、『韓国内物資調査報告書』から引用すると以下のとおりである。

#### 「訓令

- 貴官ハ馬山浦ヨリ京釜南路ヲ通ジ京城ヲ経テ義洲ニ至ル沿道各地ニ於ケル左ノ事項ヲ調査シ復命スベシ
- 一 道路ノ状況 但シ給養品の運搬ヲ顧慮スベシ
- 二 運搬具及運搬力其他運搬ニ係ル状況
- 三 住民ノ生業及ビ生活ノ状況
- 四 物資の状況 但シ軍隊給養品の調達ヲ顧慮スベシ
- 五 各地方通貨ノ状況

明治三十六年八月一日

陸軍省経理局長外松孫太郎<sup>(12)</sup>

命令を受けた高山監督は、以下の日数と経路で朝鮮半島内の実地調査を行っている。明治三十六年八月一日、釜山に上陸し、京釜南路即ち馬山、普州、河東、南原、全州、群山、公州、水原、仁川等を経て京城に至り更に京義街道即ち開城、黃洲、鎮南浦、平壤、安州、定州等を経て義州及龍岩浦地方に到達した。

帰路は、龍川、鉄山地方より博川地方を経て平壤に出て、元山街道即ち江東、成川、長林里、陽徳、徳源を経て九月二八日に元山に到着し、そのまま帰国したと思われる。その間の日数は約四七日、陸路の距離は約四百里（一五七〇・八km）、一日平均八里半（三三・四km）を移動したと報告している。おそらく、高山監督本人と朝鮮人の案内人、通訳、若干名の部下を伴つての公然たる行動と思われる。

具体的調査要領は高山監督が以下のように報告している。

「道路ノ如キハ日々之ヲ行進シテ其難易ヲ実査シタルハ勿論ナルモ戸数運搬具及物資ノ如キハ統計的觀念ノ皆無ナル朝鮮ニ在テハ確實ト認ムベキ材料ナキヲ以テ或ハ地方官吏或ハ上民中稍ニ智識アル者或ハ日本居留民中内地ノ事情ニ通ズルモノ等ノ陳述ヲ参照シ尚親シク地形、人口ノ粗密、輸出入ノ高、集散ノ状況、田畑原野程度ヲ判断セリ」

高山監督は、釜山から京城と平壤、義州、元山までの経路を実際に自分の目で見て調査し、必要に応じて、朝鮮国の官吏、住民及び日本人居留民から入手した情報をもとにして、地形、人口及

び物資の状況を調査した。

高山監督が調査した経済情報について外松主計監の訓令の項目に基づいてその概要を説明すると以下のとおりである。

当時の軍隊は徒歩または馬で移動するので道路の状況、人畜の通行の難易についての情報は必要である。また河川交通の情報も必要である。

高山監督は、釜山・京城間の京釜南路、京城義州間の京義街道及び平壤元山間の元山街道を踏破し、道路中途の主要な都市・集落を調査して、部隊の移動、軍需品の輸送の便及び宿營給養に適しているか否かを重点に調査した。同時に蟾津江、錦江、漢江、大同江及び鴨緑江の河川交通の状況を調査して軍事上の輸送に利用可能であるかどうかを調査した。その結果を簡単にまとめると第2表のとおりである。

地域によつて差はあるが、道路の状況は一般に悪く、部隊が移動するためにはなんらかの補修作業が全線にわたり必要。一部の都市周辺は比較的物資が豊富で、部隊の給養は可能であるが、山岳部の集落では、貧窮のため物資も乏しく給養は困難な状況であると評価している。また各地とも宿營は困難なので天幕と防寒具の準備は必要であると述べている。

軍隊の輸送に必要な役務・輸送手段を現地調達するためには、当該地域ではどんな輸送手段があり、およそどの程度の物資を輸送することが可能かの情報が必要である。

朝鮮で調達可能な運搬具は、牛・馬・牛車・人夫の四種類であるが、牛と人夫は至る所で調達可能である。しかし、前述したよ

第2表 朝鮮半島の交通状況

1 道路

経路	距離	道路の状況	沿道の地形	宿營給養の便	主要都市・集落
京釜南路	約55里	頗る粗悪、大修理が必要、南	山多く部落耕地山間に	一般に貧村不便。	馬山、晋州、南原、全州
馬山－全州	約216km	原求札間に険阻な峠あり。	錯綜。		
京釜南路	約55里	概ね平坦、小修理により輻重	平坦、田畑に富む。	最も豊饒の地、有利。	公州、水原、京城、仁川
全州－京城	約216km	車・野砲の通過可能。			
京義街道	約120里	一般に平坦、小修理により野	山岳、平野一様ならず。	平壤を中心とした地域は	開城、平壤、鎮南浦
京城－義州	約471km	砲等通過可能。		有利、山岳部は困難。	
元山平壤街道	約50里	成川まで輻重車通過可能、以	山嶺重疊河川迂曲、耕	ほとんど山間の寒村、給	成川、陽徳、元山
	約196km	後駄馬のみ通過可能。	地谷間の瘦地のみ。	養困難。	

2 河川

河川	状況	軍需品輸送上の価値
蟾津河	河東より求礼迄100石積位の河舟上下するも上航は稍や困難なり。	
錦江	群山、江景まで百噸位の汽船往復す而して其上流公洲までには200石積位の河舟上下自在なり。	群山—公州間の運搬に便利。
漢江	仁川、京城及開城の間80噸位の汽船往復す。	仁川—京城及び仁川—開城間の運搬に便利。
大同江	鎮南浦より平壤まで100噸位の汽船往復す。	鎮南浦—平壤間の運搬に便利。
鴨綠江	江口より龍岩浦まで100噸位の汽船往復し其の上流義洲までは100石積の河舟上下す。	

3 鉄道

鉄道	状況
京釜鉄道	京城—水原付近、釜山—密陽付近のレール敷設完了、36年中に天安、大邱まで開通予定。

※ 出典 前掲「韓国内物資調査報告書」(1903)より作成。

うに道路の状態が粗悪なので輸送が困難な状況にあると述べている。

河川交通については、蟾津河、錦江、漢江、大同江及び鴨緑江では、百トン程度の小汽船や百石積程度のジャンク船が相当存在するが、河川と主要道路が平行していないので、軍需品輸送上の利点は少ない。但し群山、仁川、鎮南浦の港灣と京城、開城、平壤との輸送連絡に使用可能な利点がある。

京釜鉄道は、調査時には京城―水原、釜山―密陽のレールの敷設が終了、明治三十六年中に北は天安、南は大邱まで敷設されると推測している。

輸送運搬具の能力は駄馬一頭当たり、米一石・約三八貫目（一八〇ℓ・一四二・五kg）を駄載し一日平均五里（一九・六km）の移動が可能、人夫一名は米三斗・約十二貫目（五四ℓ・四五kg）を負い一日平均約六里（二三・八km）の移動が可能と見積もっている。ちなみに『大正五年改訂 作戰給養教程』によれば、馬及び牛の負担量は二四貫から三六貫、人の負担量は状況によつて異なるが六貫から一二貫としているので、この数字は当時としては妥当なものと思われる。

作戰行動を行う地域の住民がどのような社会生活を営み、何を生業に生活しているのか、我方に好意的であるか否か、何を考えているのかを知る必要もあった。

高山監督は、朝鮮国に居住する、朝鮮人、日本人、中国人、欧米人について調査している。そのうち物資の調達等で相手にするのは朝鮮人と日本人のみであるとしている。しかし朝鮮人と朝鮮

国内に居住している日本人に対する高山監督の評価は大変厳しいものがある。

朝鮮人に対する高山監督の評価を引用すると以下のとおりである。

「彼等ハ一般ニ無知暗黒ニシテ殖産興業ノ術ヲ知ラズ又懶惰ニシテ生業ヲ励マズ經濟貯蓄ノ觀念ナシ故ニ所謂其ノ日暮シノ細民多ク概シテ云エバ全体ニ貧弱ナリ只、所々ニ少数ノ大地主アリ三百石ノ乃至二千石位ノ收穫米ヲ上グルモノアリ然シ此等ノ者ハ屢、官衙ヨリ徴金ヲ要求セラルヲ恐れ故ニ富有ヲ隠蔽シテ外見ハ矢張り貧民体ヲ装ヒ居レリ」

朝鮮人は、基本的には農民で、他の産業に従事する者は少ない。漁業もあり盛んではないし、工業に至つては見るべきものはない。少数いる商人も商売のやり方が幼稚な小商人にすぎない。彼らは無知で無気力な怠け者で、近代的な意味での経済觀念が欠如した貧乏人が大部分をしめる。一部の富裕層も自国政府の搾取を恐れて貧しいように偽装しているありさまであると観察している。

この内容は、明治二七年から明治三〇年にかけて朝鮮を旅行した英国人女性イザベラ・バードによる旅行記『朝鮮紀行』の朝鮮人の生活に関する記述と驚くほど共通している。但し、高山監督の非好意的態度に比べて彼女の朝鮮人に対する態度は著しく好意的である。しかし朝鮮人が長期にわたる自国政府による厳しい搾取によつて完全に窒息し無気力状態に陥っている様子が描写されている点では両者の見解は一致している。



第3表 朝鮮半島で入手可能な給養品一覧 (明治36年調査)

品名	品質	生産量・輸出高・買 入高	生産地	調達可能時期	価格	備考
米	日本の普通米と甲乙なし。 収穫法・精製法粗末不完全。	年間生産量800万石、日本の1/5。 年間輸出高75万石。	洛東江下流沿岸 嶺南江沿岸地方 嶺南、畿内、三和、博多、釜山 その他西海岸の地域	10月～1月供給力大、2月～5月三分の一に減少、6月～9月供給力なし。 開港場の貯蔵米により7～8月の調達可能。	玄米1石9円 白米1石12円 相場は大坂米市場との比較で地域により同額から3円50銭安の幅あり。	朝鮮内地の玄米増産の方法不完全のため、開港場の増精設備を利用して軍隊の需要を確保する必要あり。
大麦	朝鮮人自身の見解によれば地味に適さない。	生産量少ない。釜山、群山、仁川、鎮南浦でそれぞれ3千石の買入あり。	京釜南路では普州、河東、全州、公州付近。京義街道では鳳山が多い。	収穫期の7月～12月まで。	1石4円	8月から10月にかけて飯料の繁きに食用にする。 馬糧として利用するなら追送が必要。
雑穀		生産量700～800万石	京義街道沿線の鳳山、黄州、平壤、安州で豊富。	大豆、小麦は輸出。 粟以下の雑穀は農家に年間を通じて備蓄あり。	大豆1石5円、小麦1石7円、粟1石4円、稗1石3円、黍1石5円	大豆、小麦、粟、稗、黍の順に多い大麦に代わって馬糧の代用に適当。
牛		朝鮮唯一の特産物。	到る所に豊富		牛肉100匁6銭 ～8銭、牝牛40円 ～50円、牝牛20円～30円、子牛7円～8円	
豚			京義間・平元間稍多く、京釜間少ない。 全道各所に飼養。		豚1頭3円～5円	
鶏					鶏卵1個6厘～1銭 鶏1羽40銭前後	
魚類		鮮魚は各地一般に不足。 明太魚の乾物・塩物は乏しからず。	釜山は比較的豊富?			魚族は乏しくないので漁獲方法を確立すれば需要を充たせる。

野菜類	大根・白菜		至る所。	9月～1月乏しからず。	東京地方の半値	瓜大根・菜豆・塩・漬物 用薬があるので日本人 の嗜好に合う漬物の自 製が可能。
漬物	臭気のため最初は日 本人の嗜好に適さな いか増えれば美味し いので利用可能。		朝鮮人の主要な副食物。			
塩			至る所乏しからず。		1升56銭	原料はあるので自製す れば給養可能。
味噌	朝鮮のものは不味く 給養品に利用できな い。					
醤油	朝鮮人のものは使用 できない。		釜山、蔚山、仁川、鎮南 浦に醸造家あり。		日本より安い	現地自製品を利用すれ ば給養可能。
酒			釜山、蔚山、仁川、鎮南 浦等の開港場に醸造家あ り。		焼酎 1 升 50 銭 ～1円 濁酒 1 升 10 銭 ～15 銭、日本より 安い。	原料安価、酒税なし
乾草	純清の乾草の調達は 不可能					夏季に時間があれば臨 時に製造可能。 雑穀の茎葉で代用可 能。
鹽			各地十分な供給力あり。	10月～3月容易、その他の 季節稍困難。		
燃料	森林無く、薪炭の貯 蔵する習慣が無く、 燃料の供給困難。		南原京城間、京義間、平 壤元山間に相応の松の立 木がある。		炭 10 貫 90 銭～1 円 薪 10 貫 35 銭～40 銭	事前に給養部で薪材を 伐採するか、部隊で道 具を用意して伐採すれ ば給養可能
飲料水	飲料水の確保可能。		井戸の構造不完全で数が 少ない。 至る所に清流あり。			釜山、仁川、鎮南浦等 の海岸地帯は飲料水が 不足。

※ 出典 前掲「韓国国内物資調査報告書」(1903)より作成。

明治三六年当時、朝鮮国内に居住している日本人は、約五万人程度で、中国人の約二千人、欧米人の六〇人に比べて、圧倒的であつた。釜山、馬山、木浦、群山、江景、仁川、京城、開城、鎮南浦、平壤、元山、城津等の開港場に集中して居住し、主に穀物商、雜貨商、売薬業、輸送業、労働者等であつた。一部に資産を有し信用できる商人がいるものの、大部分は信用できない投機的事業者・内地での失敗者で、物資の調達に利用するには注意が必要と評価している。

作戰地域において部隊が行動するのに必要な糧秣等が現地において調達可能か否かは、あらかじめ調べておかなければならない。場合によつては作戰の成否に影響する。食料品等の生産状況と流通組織、商慣行等の情報も必要になる。また補給施設を開設するため、物資が保管可能な建物の確保も必要である。

朝鮮半島で入手可能な給養品については高山監督の調査した詳細は第3表にまとめたが、概要については以下のとおりである。

朝鮮国内で生産されている農産物として、米、大麦、小麦、大豆、粟、稗、黍を上げ、特に主食である米を重視して、生産地、輸出の状況、品質、精米の能力、取引相場、季節に応じた調達可能量について詳細の調査している。

副食物に使用可能な、牛、鶏、魚、生野菜、漬物<sup>(17)</sup>、塩、味噌、酒等についても調査し、調達可能と評価している。

軍馬・駄馬の食料になる乾草の調達については、稍困難であるが、雜穀の莖葉で代用可能と判定している。

燃料（ここで云う燃料とは、暖房用・炊事用の燃料のこと）の

調達は、森林が少ないこと、薪炭を貯蔵する習慣がないことなどから困難なので、部隊で予め採薪器具を準備し、松の立ち木を伐採して薪にして部隊の需要を充たす必要がある。

飲料水については、井戸の構造が不完全な上、数も十分でないので大部隊の需要を充たすのは困難であるが、経路上にある清流の水を利用できるので海岸以外では飲料水の確保は可能としている。

また、補給施設を開設するための利用可能な施設については、固有の穀物倉庫がないので、各地にある役所の付属建築物等を利用すれば確保可能としている。

さらに、朝鮮国内で物資を調達するに当たつての具体的留意事項として、朝鮮人には自国政府による長年の圧制と搾取の結果、そもそも近代的な意味で法律や契約を尊重するという概念がなく、猜疑心が異常に強い<sup>(18)</sup>ため、強制的に徴発を行おうとすれば、掠奪と看做されて、知略を尽くして巧妙に物資を隠されてしまう。実際、日清戦争の時、元山枝隊が強制徴発を行おうとしたが全く成果がなかった。かといって円満に協定を結んで物資を購入しようとするのも全く時間の無駄であり、最良の方法は正當な代価で物資を買い上げ<sup>(19)</sup>ることを提案し、物資を差し出さなければ厳罰を課すと威嚇し、物資を供出した者には正確に代価を支払って買い上げる強制購買が最も有効な方法であるとしている。

物資を調達する際、郡守等の地方官吏は住民に対して事実上無制限の権力を行使しているので、彼らの権力を利用する方法は有効ではあるが、物品の受け渡しと代金の支払に彼らを決して関与

第4表 朝鮮半島における通貨の状況(明治36年調査)

種類	価値・交換レート	通用地域	備考
韓銭 (一文銭)	民間の流通において本位貨幣。 100文=14銭~15銭	慶尚、全羅、江原、咸鏡(元山、釜山、馬山、木浦、大邱、全洲等に至る地方)	鑄造廃止のため流通高に限り、出納上の計算、格納、運搬に不便。
白銅貨 (二銭五分)	現行の制定貨幣、信用低い。本来は1個で5銭に相当、実際は4個で10銭の価値、1個で2銭5厘~2銭6厘。	京畿、忠清、黄海、平安(群山、公洲、京城、平壤、義洲等に至る地方)	韓国造幣局に500万円位貯蔵。容積重量かさみ多額の使用に不便。
第1銀行券・ 日本銀行券及 び日本貨幣	紙幣は一部の朝鮮政府の機関と少数の韓人が信用して受領する。金貨・補助貨幣の信用は低い。	釜山、馬山、木浦、群山、京城、仁川等の日本人居留地がある場所で通用。	韓銭と白銅貨は取引に不便なため日本紙幣の通用が韓人の間で拡大中。
日本旧円銀	韓人は自国の白銅貨より信用している。	元山より平壤、義洲に亘る地方。	日清戦争を契機に通用。
露貨(ロシア帝国の通貨)	銀貨・紙幣が信用されている。	咸鏡道の北部即ち慶興地方で通用。	

※ 出典 前掲「韓国内物資調査報告書」(1903)より作成。

させてはならないとしている。なぜなら、彼らは腐敗しているの  
で代金を着服横領して、その結果軍隊が住民の恨みを買う結果に  
なるからである。日本人商人を利用するのにも注意が必要として  
いる。その根拠として日清戦争時に京城・仁川の悪質な日本人商  
人が軍隊の名を騙って、朝鮮人を強迫して法外な安値で米を買い  
集め、これを軍隊に売りつけて暴利をむさぼった結果、軍隊が恨  
まれる事態に陥った事例を上げている。高山監督は、日本人商人  
に調達を請け負わずに、彼らを日給で雇い、軍隊の指揮下で働  
かせる方法を提案している。

さらに、日清戦争時に清国の軍隊が朝鮮で掠奪を働いたのに対  
して、日本の軍隊は調達した物品の代金は勿論、雇用した人夫の  
賃金、宿舎料まで正当に支払ったので、朝鮮人から一定の信用を  
得ていることを述べ、このことが朝鮮国内での補給物資の調達を  
有利にしているとしている。しかし、朝鮮では商業が余り発達し  
ておらず、物資を貯蔵しておくことが余りない、物品の品質も悪  
く、さらに輸送交通の便も悪いので、現地調達は困難である。適  
時適切に軍隊の需要を充足するためには、時間の余裕、担当者の  
努力及び適当な施策が必要であるとしている。

現地で物資や役務を調達する場合、必ず支払いをしなければなら  
ない。略奪などをして住民の恨みを買ってはならない。そのため  
現地で通用している通貨や物価についての情報が必要である。  
また正貨流出防止のため軍用手票を発行して支払いに使用し、軍  
の後方に交換所を設置して軍票を回収する必要がある。

朝鮮国内において、物資を調達するためには、朝鮮国内に流通

している通貨の状況について知らなければならない。朝鮮で通用している通貨は、朝鮮政府発行の韓銭（一文銭）と白銅貨、日本の紙幣と貨幣及びロシアの紙幣と貨幣がある。高山監督の調査結果は第4表のとおりである。その概要を説明すると、朝鮮政府発行の一文銭と白銅貨は品質が粗悪で価値が下落しているので、自国民からもあまり信用されていない。日本の勢力が浸透する過程で取引に便利するため日本の紙幣の通用が拡大中、またロシアの勢力が浸透している朝鮮北部で、ロシアの通貨が通用している状態である。

ちなみに高山監督が調査した明治三十六年一〇月現在の朝鮮の物価は第5表のとおりである。地域によって差異はあるが、日本に比べて一割から二割安い<sup>19)</sup>が、日本からの輸入品は割高であるとしている。

高山監督は、軍隊が朝鮮で物資・役務の調達に対して支払をする場合、韓銭・白銅貨を使用するならば、容積、重量が嵩み不便なので、軍用手票を発行して支払に使用し、金庫派出所を後方に設置して韓人の要求に従って韓銭・白銅貨または日本の通貨と交換する案を提案している。具体的には一〇銭、五〇銭、一円、五円、一〇円の五種類の軍票を発行し、一〇銭以下の取引には韓銭、白銅貨を両替して使用する案を提案している。

軍用手票（軍票）が発行される理由は、当時の通貨制度が金本位制であり、外国での調達を兌換紙幣で支払った場合、正貨が流出する恐れがあるからである。また、支払に硬貨を使用した場合、保管、運搬、出納等が不便になるので、後日現金と引換可能な支

払証書としての軍票を使用した方が事務処理上便利であるとの理由もある。

軍票の取り扱いについては、開戦直前の明治三十七年二月六日に「軍用切符発行に関する閣議案」及び「軍用切符取扱順序」が閣議決定されて一〇銭、二〇銭、五〇銭、一円、五円、一〇円の六種類の軍用切符が発行された。当初一億円の予定であったが、明治三十八年八月一日まで一億四八四一万円に達した。<sup>20)</sup>

現地で経済情報を直接収集する場合、調査者が直接観察し自ら経験した具体的な事例をもとにして、野戦給養を実施するための具体的に適切な業務の実施要領を示してやる必要がある。現地で部隊が実際に兵站業務を実施するに当たり必要になるからである。

高山監督は給養経理上一般の観察事項として以下の点を指摘している。

朝鮮国内では、二個師団から三個師団の給養が可能な物資を調達することが可能である。

出納官吏等が日本国内と同じように朝鮮人に対して領収証書等の提出を求めるのは朝鮮国内の状況から無意味であり、支払証明をもって代えるべきである。形式的な事務処理は止めて、まず事実の証明を優先させるべきであるとしている。

朝鮮の物資を利用すれば、比較的安価に物資を調達することができ、経費を節減できる利点がある。

朝鮮国内の物資を調達して代金を支払えば、正貨流出の不利はあるが、金を手にした朝鮮人は結局日本製品を買うことになるの

第 5 表 朝鮮内地の物価（前 3 ヶ年平均標準）（明治 36 年 10 月調査）

物 件		価 格（日本貨）
韓 錢	100 文	14 錢～15 錢 5 厘
白銅貨	1 個	2 錢 5 厘～2 錢 6 厘
円 銀	1 個	85 錢～90 錢
玄 米	1 石	9 円代
白 米	1 石	12 円代
大 麦	1 石	4 円代
大 豆	1 石	5 円代
小 麦	1 石	7 円代
玄 粟	1 石	4 円代
玄 稗	1 石	3 円代
玄 黍	1 石	5 円代
炭	10 貫目	90 錢～1 円
薪	10 貫目	35 錢～40 錢
牛 肉	100 匁	6 錢～8 錢
牡 牛	1 頭	40 円～50 円
牝 牛	1 頭	20 円～30 円
小 牛	1 頭	7 円～8 円
生 牛 皮	1 枚	4 円～5 円
豚	1 頭	3 円～5 円
鶏 卵	1 個	6 厘～1 錢
鶏	1 羽	40 錢前後
野菜類		不定なるも東京地方の約半額
塩	1 升	56 錢
人 夫	日給	30 錢～40 錢（食事は自弁）
駄 牛	1 日雇切、馬夫共	1 円 50 錢～2 円
同	日本里程 1 里	22 錢～30 錢
駕 籠	1 日雇切	2 円～2 円 50 錢
同	日本里程 1 里	35 錢～50 錢
飯 代	1 食	15 錢～25 錢
焼 酎	1 升	50 錢～1 円
濁 酒	1 升	10 錢～15 錢
備 考	1	度量衡は一定しないため日本のものに換算されている
	2	相場は普通の標準のものを採用

出典 前掲「韓国内物資調査報告書」（1903）附表第二号より作成。

で、日韓の貿易を促進し、戦争による損失を幾分か回収することが可能になる。

高山監督は、この報告書で、陸軍経理部が朝鮮半島で野戦給養を実施するために必要な経済情報を詳細に収集し、的確に分析して報告している。一方でこの報告は、急いでまとめられたためか、用語の使用が統一されておらず、正式の報告文書としては例を見ないほど個人としての感想が混じった感情過多な表現が散見される。また現代の基準では不適切な表現が多々見られる。しかし、その一方、対露開戦を控えた当時の陸軍経理官の危機感、焦燥感が生々しく感じられるものである。

また、陸軍経理官の気風として、経済、金融に詳しく物事を合理的かつ科学的に観察して行動する反面、非常に辛辣で容赦ない見方をする面がある。その気風が日露戦争前に、すでに現れていることは興味深い。

#### 四 濱名寛祐によるロシア極東地方等の調査

ロシア極東地方は、ロシア帝国のアジア経略の策源地であり、シベリア鉄道でヨーロッパ・ロシアと連絡されている。対露戦略上、ロシア極東地方の経済情報の入手は絶対必要である。

明治二五年から二六年にかけての福島安正によるシベリア単騎横断は大変有名であるが、明治三四年から三五年にかけて、陸軍三等監督濱名寛祐<sup>21</sup>がロシア極東地方で経済情報の収集に当たり、明治三五年に情報収集中にロシア軍に逮捕され明治三七年までウラル地方で多数の民間人とともに抑留されていたことは余り知ら

れていない。<sup>(21)</sup>

濱名寛祐は、静岡県の出身とされているが、本人の言によれば元治元年江戸四谷の生まれという。明治二年六月三〇日に三等軍吏（少尉）になり、日清戦争に従軍して金鵄勲章功四級を授与されている。明治三四年三月、金沢の第九師団監督部に監督補（大尉）として所属していた時に、露語及び兵要地理学研究のためと称して、一年間の休暇とロシアへの渡航を陸軍省に申請した。これは誰かに命ぜられたものではなく自発的なものである。明治三四年の段階で軍内に対露脅威感が浸透していたことを窺わせる。しかし、当時の陸軍省経理局長監督総監野田豁通は、政治的な背景を疑ってこれを許可しなかった。

明治三四年四月一五日に、野田監督総監が予備役になり、経理局第一課長外松一等監督が、監督監に昇任して経理局長に就任したのを機に、外松監督監から一年の休暇と留学は許可され、四月三〇日付で正式に陸軍省から許可が下りた。即日外務省に旅券を申請し、「潮野鉦之介」の偽名で旅券を取得。五月七日に七尾港から出港して、九日にウラジオストクに到着、ロシアに入国している。

本人は自らの著書の中で、自分は陸軍からいかなる命令も受けていないし、間諜ではないと主張しているが、外松局長からなんらかの指示を受けている可能性は高いと思われる。なお、濱名監督は明治三七年一月六日に無事帰国し、戦後は順調に累進し、師団の経理部長等を務め主計監まで昇進している。

濱名監督が、外松局長から受けた指令は基本的には、高山監督

が受けたものと同じと考えられる。ロシア極東地方はロシア帝国のアジア経略の策源地であり、対露戦略上、この地域の情報の入手は絶対に必要であるが、日本の勢力が及んでいる朝鮮国とは違い、ロシア帝国の領土であるシベリア・極東地方を日本の軍人が公然と活動することは困難である。駐在武官を通じての情報活動にも限界があり、身分を隠しての潜入ということになるので、有能でない人間は派遣できないが、そこにちょうど意欲十分な人間が名乗りをあげてきた上に、日清戦争の従軍経験があるということで、許可したのではないかと推測される。

濱名監督は、明治三四年五月九日にウラジオストクに上陸、ウスリー河と黒龍江沿いに移動して、ネルチンスク、チタを経て、同年七月にはイルクーツクに現れ、同地で写真店を経営していた日本人と接触、さらに自らの正体を隠して東シベリア総督のロシア貴族に懇請して、ロシア正教会へ入信し、総督から身分証明書を手に入れている。さらに露清国境のキャフタと賈買城を視察し再びシルカ河・黒龍江經由でブラゴベンチェンスクに現れ、明治三五年の元旦を過ぎた。さらに寒中を馬車でハバロフスクに移動、再びウラジオストクに潜入し、さらに密かに露清国境を突破して清国の哈爾濱に現れた。

哈爾濱に滞在していた時期は、明治三五年三月から四月にかけてと推測される。その根拠は、濱名三等監督が明治三五年三月一九日付で「私費留学延期願」を陸軍大臣宛に提出し、同年四月一八日付で陸軍大臣の決裁を受けて私費留学の一年延長が許可されていることを証する文書が存在するからである。この事実は敵国

大横断記の記述の真实性を裏付けている。<sup>23)</sup>

その後、再び松花江・黒龍江を下ってニコライフスクに到着、ここから樺太に渡航して調査を行った。さらに沿海州の沿岸を調査して三度ウラジオストクに潜入した。

明治三五年七月四日、濱名監督は売薬商人に変装し、二名の民間人を伴って、沿海州の南端の中国と朝鮮の国境近くのボセツ要塞付近で、図們江（豆満江）を渡り清国の琿春に向かうとしたところを、ロシア軍斥候に逮捕された。

濱名監督はウラジオストクに連行されて取り調べを受けたが、ロシア側は当初から彼が日本軍の将校でスパイ活動を行っていたのではないかと強く疑っており、様々な策を弄して自白を迫ったが、濱名監督は、あくまで自分は民間人で唯の売薬商人だと言いつ張った。

結局武器及び文書等の決定的な証拠も所持しなかったため、特別任務班の横川省三や沖積介のように処刑されることは免れた。

しかし、ウラジオストク、ハバロフスク、チタ、及びネルチンスクの監獄を巡回しにされ、最終的に多数の民間人と共にトムスク經由でウラル地方のベルミに送られることになる。当時、ロシア極東地方には一般労働者、商人、酌婦等として多数の日本人が在留していた。ウラジオストクに居た日本人は日露開戦と共に引揚船で帰国したが、内陸部のブラゴベンチェンスク、ハバロフスク、ニコライフスク、サハリン等に在留していた日本人は帰国の機会を失い、ロシア側に抑留されてしまった。またロシアの実質



的支配下にあった満州で逮捕された者も少なくなく、朝鮮北部でコサック兵に逮捕された者もいた。これらの日本人は、シベリア総督の命令により、トムスク経由でウラル地方に移送された。彼らの大部分は民間人であったが、ロシア側は彼らによるスパイ行為や破壊工作を恐れたと思われる。文民の保護についての国際的な条約が整備されたのは第二次大戦後であり、日露戦争の時点では抑留された交戦国の民間人の地位は曖昧であり、流刑囚に準じた取扱いを受けたと思われる。組織的な虐待はなかったものの、その処遇は人道的とはいえない状況であった。ウラル地方に抑留された日本人は八四二名に上ったが、最終的には米国政府の仲介によってロシア政府が出国を許可し、明治三十七年一〇月三日に独逸に出国、同年一〇月二四日ブレーメンを出港、一二月六日に長崎に全員が帰国した。濱名監督は翌七日、一同解散の後、東京に向けて出発、野戦経理長官外松主計監の下に報告のため出頭したものである。

濱名監督は、ロシア極東地方の東シベリア、沿海州及び樺太において、陸軍経理部が野戦給養を実施するのに必要な、物資、輸送手段等の現地調達の可能性、道路、鉄道及び河川交通の状況、主要な都市・集落における宿営、給養の可能性及び通貨の状況等の経済情報を収集、分析して報告したと思われる。それは前述した「私費留学延期願」の中にその一端が現れている。例えば、濱名監督は、兵站における黒龍江等の河川交通の重要性が満洲鉄道開通によって低下したことを指摘している。

ロシア軍に逮捕される以前に収集した経済情報は、現地の日本

の商社「大和商会」を通じて報告されていたと思われる。また、これらと併せて濱名監督がロシア抑留中に知りえたロシア国内の内部情報は、政府及び陸軍の状況判断と戦争指導に貢献し、高い評価を得たものと推測される<sup>26)</sup>。

## 五 日露戦争の勝利と陸軍経理部の経済情報活動

開戦前、政府及び軍の上層部では、来るべき対露戦争は、日清戦争と同様に主戦場が朝鮮半島で、朝鮮に侵入してきたロシア軍を日本軍が迎え撃つという経緯だと想定していた<sup>27)</sup>。少なくとも満州の支配権を奪取するため満州でロシア軍と本格的な戦闘を行う構想は当初はなかったと思われる。

陸軍参謀本部ではその想定に対応した対露作戦構想を策定していたと思われる。第二章で触れた田村少将による韓国偵察命令はその構想に沿ったものである。

陸軍経理部では当初から経済情報の収集の重要性を理解し、明確な方針のもとに対露戦略上重要な地域における経済情報を収集、分析していた。その成果として、現地における兵站活動に資する有用な経済情報を陸軍参謀本部や現地で作戦行動をする部隊に対して提供することができたのである。

陸軍経理部の経済情報が実際の作戦行動に貢献した具体的な実例を以下にあげる。

- 1 先行的な兵站活動を実施して初動において作戦部隊を有効に支援した例。

【韓国内物資報告書】が明治三十六年一月二〇日付で陸軍省経理局に提出されて間もなく、朝鮮に上陸予定の部隊を支援するため以下のような先行的な兵站活動が実施された。

明治三十六年一月には早速、物資を収集するため三等主計正大江玄寿他五名の経理官が朝鮮国の釜山に派遣された。<sup>28)</sup>

明治三十七年一月一七日付で、陸軍省経理局は陸軍糧秣廠に対して秘密裏に塩干魚一万九千三百貫匁、醬油エキス九千貫匁、燕麦一万五千石、麩千百石、干草一〇万貫匁、薪三〇万貫匁を予定価格一六万四六〇円で調達、燕麦は三井物産会社により朝鮮国群山へ輸送させ、その他のものは広島府の宇品支廠に貯蔵させることを命令した。<sup>29)</sup>

京城及び仁川に軍馬等の飼料用として大麦二万石を集積した。<sup>30)</sup>

これらの一連の兵站活動は対露開戦をにらんで先行的に実施されたものであるが、事前に収集、分析された韓国内の経済情報によつて先行的な兵站活動が可能になったためである。

2 状況の変化に応じて第一二師団の上陸地と師団兵站計画を変更し柔軟な部隊運用が可能となった例。

明治三十七年二月五日に動員下令された第一二師団（小倉、師团长井上光中将）は、二月七日に大本営から示された作戰計画により、師団の半数を韓国南部の粟梁津、残りを馬山浦に上陸させ、京釜南路上を京城まで前進させる予定であった。師団は兵站計画を作成し京釜南路上に兵站施設の開設を計画していた。しかし仁川沖海戦の結果として黄海の安全性が確保されたため、師団は二月一日に大本営から仁川への上陸地変更命令を受けた。師団隷

下部隊は、変更された計画に基づき動員完結後に門司及び長崎から逐次仁川へ向けて出港し、一六日より二七日にかけて続々と仁川に上陸し、京城並びに開城付近に集結した。<sup>31)</sup>このように状況の変化に応じた柔軟な部隊運用が可能であったのは、事前に収集、分析された韓国内の経済情報によつて柔軟な状況判断と部隊運用が可能になったためである。

3 一部の悪質な在留邦人の商業活動を制限し後方地域の安定を図ることが出来た例。

高山監督の報告では、日清戦争の事例を上げて朝鮮国内に留する悪質な日本人商人の悪質な商業活動に伴う摩擦の発生を懸念し、その発生防止の具体的方法が提言されている。

実際明治三十七年二月五日の対露開戦とともに、韓国及び清国において、これを奇貨として一儲けを企む一部の悪質な日本人商人の活動が始まったと思われる。

彼らの活動の結果として、物資の価格が上昇して、日本軍の補給物資調達に支障を生じて部隊の作戰行動を阻害する要因となり、さらに朝鮮人との間に軍用手票の交換に関連した摩擦が発生する事態となった。そのため明治三十七年四月一二日には陸軍省経理局は陸軍一般に通知を出し、外務省のいわゆるブラックリストに乗っている清国在留禁止者六〇名、韓国在留禁止者百七名を陸軍が傭人、軍役夫、供給請負人として採用することを禁止する処置をとっている。<sup>32)</sup>

さらに明治三十七年四月一八日付で大本営からは参謀総長大山巖元帥の名で、第一軍司令官黒木為禎大将と第二軍司令官奥保蔵大

将へ、日本人商人の不正な活動が軍の作戦行動を妨害しているとし、各軍の担任地域から彼らを退去させることを命令している<sup>(33)</sup>。

これらの処置によって悪質な日本人商人の活動がどれだけ抑制出来たかは不明な点があるが、在留日本人の信頼性等についての事前の情報があつたため、比較的迅速な対応がとることができたものと思われる。これらの一連の処置は作戦行動に対する阻害要因を排除しつつ、韓国での無用な摩擦発生を回避し後方地域の安定を図る意図があつたといふことができる。

4 第一軍への兵站活動に資する経済情報を供給し、緒戦における重要な戦闘の勝利に貢献することが出来た例。

第二師団は二月一六日～二七日にかけて仁川に上陸し、京城經由で平壤に向けて移動し三月一日～一八日の間に到着。三月一〇日に近衛師団が鎮南浦に上陸、三月一八日には第一軍司令官黒木為大将と第二師団が鎮南浦に上陸、四月上旬までに第一軍主力が朝鮮北部に集結した。高山監督の偵察した仁川―京城―平壤―義州の経路はまさに第一軍の主要な行進経路となつている。第一軍を支援するため、仁川―京城―平壤―義州の経路上に補給施設（兵站司令部、兵站倉庫、野戦倉庫）が開設され、各部隊に対して補給を実施している<sup>(34)</sup>。道路の状態の悪さと悪天候により兵站活動は決して容易ではなかつたが、道路の補修に当つた工兵部隊、輸送にあつた補助輸卒隊及び補給施設の運営に当つた経理部の努力により、内地から海上輸送された補給物資は沿岸部の揚陸場で陸揚げされ、現地で調達された物資とともに各補給施設に集積されて、第一軍各部隊への補給に使用され、兵站活動は比

較的順調に行われた。

第一軍は四月二九日から五月一日にかけて鴨緑江を渡河して清国の安東県九連城附近に布陣するロシア軍と戦いこれを撃破した。

陸軍経理部の収集・分析した経済情報は第一軍に対する兵站活動の円滑な実施に貢献し、鴨緑江の戦いでの勝利に繋がつたのである。

#### おわりに

戦争において兵站はしばしば勝敗を決定する重要な要因の一つとなる。また情報も同様に勝敗を決定する重要な要因の一つである。戦争における兵站の業務は軍隊の戦闘力を維持増進するために重要なものであるが、一方で非常に地味なものである。軍隊では作戦・戦闘に従事する部署に比べて、兵站・情報に従事する部署は脚光を浴びることが極めて少ないし、資料の内容も地味なものである。しかし、「戦争は政治におけるとは異なる手段をもつてする政治の継続にはかならない<sup>(35)</sup>」のなら陸軍経理部の日露戦争における活躍から「戦争は経済におけるとは異なる手段をもつてする経済の継続にはかならない」という言葉によって表すことが出来るのではないかと筆者は考える。

無論、経済情報活動は陸軍経理部が日露戦争時に実施した活動のほんの一部に過ぎないことは言うまでもないことであるが、陸軍経理部は経済情報の重要性を良く理解した上で、先行的に情報を収集、分析して供給し、日露戦争における陸軍及び政府の状況

判断を助け、戦争遂行と戦勝の獲得に貢献した。このことは、経済情報的重要性が極めて大きいことを示しており、陸軍経理部が極めて重要な存在であることを表している。

日露戦争は日本の運命を賭した総力戦であった。総力戦の概念は第一次世界大戦以後におけるものであるが、日露戦争は様々な意味で第一次世界大戦を先取りした戦争である。

当時の日本にとって、日露戦争はロシア帝国に対する事実上の総力戦にはかならない。

そのことは『韓国内物資報告書』の記述内容等に見られるように、経済情報活動に携わった陸軍経理官に対して有形無形の圧力となつてのしかかつていたことに示されている。

例えば『韓国内物資報告書』のなかで高山主計正が朝鮮人に対して冷淡な見解を露わにしているが、これは高山主計正一人の考えにとどまるものではなく、当時の陸軍軍人一般にある共通した認識であつたと考えられる。<sup>(36)</sup> 残念ながら日露戦争当時の日本人には他国の文化や民族を尊重するという思想はなかつたし、またその余裕もなかつたということを言う事が出来る。

## 註

(1) 旧日本軍とする用語が一般的であるが大日本帝国憲法の体制下で天皇を大元帥（総司令官）として戴く大日本帝国の陸軍という意味で、帝国陸軍とした方が適切と考え、本稿ではそのように表記する。

(2) 川口武定（一八四六―一九一八）は、和歌山県出身、当

初大蔵省に入るが会計軍吏に転ずる。明治一二年一〇月二日会計一等副監督（大佐）、明治一九年八月七日同二二年三月四日軍吏学舎長、明治二〇年一月一六日一等監督（少将）、明治二二年九月一日同明治二三年七月二六日欧州出張。明治二三年二月五日同二四年五月三〇日経理学校長（初代）。その後海軍に転ずる。日清戦争時は海軍省経理局長、明治二八年八月二〇日男爵。明治三〇年六月五日海軍主計総監・予備役。その後宮内省次官、貴族院議員を務める。大正七年一月一九日死去七十一歳。

(3) 松川敏胤は、宮城県出身。士官生徒五期、陸大三期、明治三四年一月三日大佐、明治三五年五月五日参謀本部第一部長、明治三七年六月二〇日満洲軍参謀、明治三八年一月三〇日少将、明治四五年二月二四日中将、大正七年七月二日大将、大正一一年一月二四日待命、大正一二年三月二三日予備役。

(4) 福島安正（一八五二―一九一九）は、長野県松本出身。明治二五年二月同二六年六月にベルリンからモスクワを経てウラジオストク間を単騎横断する。日清戦争時は第一軍参謀、明治三二年一月一六日参謀本部第二部長、明治三三年四月二五日少将、明治三三年の北清事变では臨時派遣隊司令官。日露開戦時は大本营参謀、明治三七年六月二〇日満洲軍第二課長。明治三九年七月六日中将、大正三年九月一五日大将、後備。大正八年二月死去六八歳。

(5) 外松孫太郎（一八四八―一九二六）は、和歌山県出身。

明治三十一年一〇月一日一等監督(大佐)、明治三十四年四月十五日監督監(少将)、經理局長。日露開戦とともに大本営野戦經理長官、明治三十八年八月二十九日には主計總監(中将)、明治四〇年九月二日男爵、明治四二年八月一日後備、明治四二年二月二日貴族院議員、大正一五年七月一三日死去、八〇歳。

- (6) 『明治卅七八年日露戦史』(参謀本部、一九一四年) 第一卷第一篇「戦争ノ起因」五頁に、「我國ニ於テハ古來ノ關係ト經濟及自衛ノ必要ニ因リ韓国ヲ我が勢力圏内ニ置クノ政策ヲ採リシモ」とある。

- (7) 『韓国内物資調査報告書』とは、陸軍三等監督高山嵩が、明治三十六年一月二〇日付で陸軍省經理局に提出した報告書である。この報告書が、明治三十六年一月二三日付で外松經理局長から陸軍大臣寺内正毅宛に送付され、参謀本部へも送付されている。「經理局韓国物資調査報告進達の件」【明治三十七年密大日記】、refC 03022318700。

- (8) 谷寿夫『機密日露戦史(新装版)』(原書房、二〇〇四年)、第二章陸海軍の開戦準備、陸軍統帥部高等政策実行の真相、九六頁。

- (9) 田村怡与造(一八五四〜一九〇三)は、山梨県出身。士官生徒二期、明治三三年四月二五日少将、同一〇月一日参謀本部総務部長、明治三五年四月一七日参謀本部次長、明治三十六年一〇月一日死去、中将に昇進。

- (10) 井口省吾(一八五五〜一九二五)は、静岡県出身。士

官生徒二期、日清戦争時は第二軍参謀、明治三五年五月五日少将、参謀本部総務部長、明治三七年六月二〇日満洲軍参謀、明治三十八年四月二〇日遼東兵站監を兼務、明治四二年八月一日中将、大正五年一月一六日大将、大正九年八月一〇日後備。

- (11) 高山嵩(生没年不詳)は、千葉県出身。輜重兵大尉から転科、明治四二年八月一〇日二等主計正、經理学校校長、明治四三年一月三〇日一等主計正、第一四師団經理部長、大正二年五月八日第一八師団經理部長、大正三年八月一六日独立第一八師団經理部長、青島要塞攻略戦に参加。大正四年二月二三日主計監、大正五年八月一八日待命、大正六年一月一七日予備役編入。

- (12) 註(7) 前掲書、一頁、原資料に頁数の記載がないため以後の引用は章節により示すこととする。

- (13) 註(7) 前掲書、「二 調査ノ要領」より引用。

- (14) 『大正五年改訂作戦給養教程』(陸軍經理学校、一九一六年) 一五六〜一五七頁

- (15) 註(7) 前掲書「五 住民ノ生業及生活ニ係ル事項朝鮮人」より引用。

- (16) 『朝鮮紀行』原題 Korea And Her Neighbors、一九〇五年刊行。ビショップ夫人ことイサベラ・バード(一八三一〜一九〇四)が一八九四年一月から一八九七年三月にかけて朝鮮国を旅行した時の実録。『朝鮮紀行』英国婦人の見た李朝末期(講談社、二〇〇一年)。

(17) キムチのことである。高山監督はこれを朝鮮人の主要な

副食物であるが、一種の臭気があるため最初は日本人の嗜好に合わないが、慣れればおいしいと報告している。しかし、帝国陸軍の定義によれば、漬物は沢庵漬、浅漬、塩漬、粕漬、福神漬、梅漬及び糠味噌漬の事を指す。キムチは帝国陸軍では採用されなかったと思われる。『昭和十七年印刷糧秣品学教程』（陸軍経理学校、一九四二年）八五～九一頁。

(18) 元山枝隊とは、日清戦争時、第三師団（名古屋）の第一八連隊（豊橋）を基幹に元山から平壤へ向けて進撃した部隊、元山支隊のこと。支隊の誤記か？ 指揮官は佐藤正太佐（広島出身、明治二八年一〇月二〇日少将・退役）、明治二七年八月二三日～二四日に豊橋を出発して、同月二七日～三〇日に元山に上陸、九月一日主力が元山を出発、所謂元山街道を西進して一二日に順安を占領、一五日の平壤攻撃に参加した。元山平壤間の約一九六kmの行程は「道路險悪人烟稀疎」の有様で物資、役務の調達は全く不可能な状態であった。糧秣はすべて元山から追送しなければならなかったため、給養は困難を極めた。そのため元山支隊が平壤攻撃時に保有していた糧食は、常食無し、携帯口糧二日分という有様であった。『明治廿七八年日清戦史』（参謀本部、一九〇四年）、第二卷第九章「平壤戦闘前日本軍ノ行動」六四～八〇頁、及び九五～九七頁。

(19) 今村忠男『軍票論』（商工出版社、一九四一年）一〇～四六頁。軍人軍属の給与には日本の兌換紙幣を使用、現地の

支払には銀兌換の軍用手票を使用した。

(20) 濱名寛祐（一八六四～一九三八）は、静岡出身。日露戦争中は鴨緑江軍司令部の幕僚として従軍、戦後は明治三九年二月二三日第一二師団経理部長、明治四〇年十一月三十一等主計正（大佐）、大正一年九月二八日近衛師団経理部長、大正二年五月八日千住製絨所長、主計監（少将）、大正三年五月一日関東都督府経理部長、大正四年二月一日待命、大正四年五月一日予備役編入。昭和一三年二月二三日死去、七五歳。

(21) 濱名寛祐「日露戦役奇談 敵国大横断記」、『陸軍主計団記事第三〇七号』（陸軍主計団記事発行部、一九三五年）。濱名寛祐がロシアでの体験を記した実録、この中で彼は間諜であることを否定している。

(22) 野田裕通（ひろみち）（一八四四～一九一三）は、熊本県出身。明治二四年六月一日会計局長、会計監督長（少将）、同年八月一六日経理局長、日清戦争時は野戦監督長官を勤め、その功により男爵、明治三〇年四月八日監督総監（中将）、明治三四年四月一五日予備役編入、その後貴族院議員になる。大正二年一月六日死去。

(23) 「一ヶ年間留学延期願ノ件」明治三五年四月、『菅大日記』refC040013618700。濱名寛祐はこの時点で三等監督（少将）に昇進していた。註（21）前掲書、一四頁。

(24) 英国人女性イサベラ・バードは明治二七年に、この付近を訪問している。彼女はウラジオストクから海路、ポシエツ

トに入り、陸路でノボキエフスク、クラスノエセロに向かい、そこから図們江（豆満江）を渡り清国の琿春に入った。濱名監督は、イサベラ女史の通った同じ経路で清国に入ろうとしたと思われる。註（16）前掲書、二八九―三二〇頁。

（25）このなかに、陸軍経理官の濱名監督のほか、満洲で破壊工作に当たった特別任務班第一班の森田兼造が紛れ込んでいる。彼は、ハイラルでモンゴル人に捕まり、ロシア軍に引き渡されたものの、帰国の機会を失った民間人の商社員と言いつ張り、結局正体が露見することなく処刑を免れた。

註（21）前掲書、第四〇節、一九九―二〇〇頁。一宮（河原）操子『蒙古土産』（靖文社、一九四四年）三六―四二頁。

（26）明治三十七年二月七日に帰国した濱名は軍法会議にかけられるどころか、二等主計正（中佐）に昇任し、明治三十八年一月一日に編成された鴨緑江軍の司令部幕僚の一人に任命されている。「鴨緑江軍将校其他拝謁ノ件」、「満大日記 一月下」明治三十八年、refC 03026136700。

（27）ロシア側の作戦構想は、日本軍を満洲の哈爾濱まで誘い出し、補給線が延びきったところで、反撃に出て包囲殲滅するという伝統的なものであった。註（6）前掲書、第一卷第三篇「日露両軍ノ作戦計畫」第五章「露軍ノ作戦計畫及其實施ノ概要」五五頁。

（28）三等主計正大江玄寿、二等主計（中尉）大西黙、小島昌、稻生隆吉、三等主計（少尉）山田英宜、西尾久五郎の六名

が派遣され、将校六名、下士卒一六〇名からなる護衛隊は動員下令後の明治三十七年二月六日に大阪から乗船して馬山に向かっている。第一軍の主力は、仁川及び鎮南浦に上陸したので、彼らの収集した物資は、韓国駐劄軍に使用されたと思われる。「大江主計正外五名韓国派遣ニ要スル諸費ノ件」「明治三十七年満密大日記」、明治三十七年一月、refC 0302002300。「蒐集品護衛者差遣ノ儀在韓大江玄寿へ命令ノ件」「明治三十七年満密大日記」明治三十七年二月、refC 03020041100。

大江玄壽（すみとし）は、岐阜県出身。第五期監督学生課程で高山嵩とは同期、明治四一年二月二一日会計監督部員、一等主計正、明治四四年十一月二二日経理局建築課長、大正三年五月一日近衛師団経理部長、主計監、大正四年十二月二三日予備役編入。

（29）「副食者其他購買貯藏ノ件」、「明治三十七年満密大日記」明治三十七年一月、refC 03020008400。

（30）清水一郎「明治三十七八年戦役ニ於ケル戦局及給養経過ノ概要」「陸軍主計団記事第三二三号」（陸軍主計団記事発行部、一九三六年三月）、九頁。

（31）註（6）前掲書、第一卷第五篇第一〇章「第二十二師団ノ渡韓」一六九―一七二頁。

（32）ブラックリストに載せられた人物がいかなる理由で在留禁止処分を受けたかは不明であるが、当時の政府により「該地方ノ安寧ヲ妨害セントシ又ハ風俗ヲ壊乱セントスル者」

とみなされた者達である。「清韓両国在留禁止者ヲ傭人ニ採用セサル件」『明治三十七年満大日記』四月從一六日至三〇日、refC 030257500。

(33) 「在韓本邦商人不良行為ニ付第一軍へ内示ノ件」『明治三十七年満密大日記』明治三十七年四月五月、refC 03020129300。

「在韓本邦商人不良行為ニ付第二軍へ内示ノ件」『明治三十七年満密大日記』明治三十七年四月五月、refC 03020129400。

(34) 註(6) 前掲書、第一〇巻、第七〇章「給養」、「一開戦ヨリ遼陽附近会戦迄ノ情況」、「其第一十二師団及第一軍」八八七〜八九四頁。

(35) クラウゼヴィッツ『戦争論上』(岩波書店、一九八六年)、五八頁。

(36) 註(8) 前掲書、九七頁。兄玉源太郎が韓国少将李學均に対して示した冷淡な言動は高山主計正と共通する認識を表していると考えられる。

#### 〔附記〕

一 防衛庁防衛研究所の史料はアジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp> のデータベースより入手した。註においてコード番号を示した史料は同データベースより入手した史料である。

二 陸軍経理部の階級については、相当する兵科の階級を括弧書きで示した。

三 陸軍軍人の経歴については主に、外山操編『陸海軍人事総覧 陸軍篇』(芙蓉書房出版、一九八三年)によった。また特

日露戦争と陸軍経理部(一)(高橋)

に、陸軍経理部については、柴田隆一、中村賢治『陸軍経理部』(芙蓉書房、一九八一年)に多くの教示を得た。

四 引用した史料中の旧漢字は現代のものに改めた。但し地名と人名についてはそのままとした。

五 引用した史料中に現代では不適切な表現があるが、当時の状況を示すため敢えてそのまま引用した。偏見及び差別を助長する意図はない。